

ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで

―来日後一〇年余の紆余曲折を経て―

坂 本 清 音

はじめに

これまでデントン (Mary Florence Denton 1857-1947) と言えば「世界で一番いい学校は同志社女子部」と言つて、こよなく女子部を愛し、同志社の女子教育のために来日から召天までの六〇年間をまるまる捧げた女性宣教師と評価され、正に「女子部の母」という称号に相応しい宣教師であつたと、讃えられてきた。

全体として、この評価に偽りはなく、最終的に同志社の女子教育のために、全身全霊を捧げた女性であつたという評価に異論を唱える積りはない。しかしながら、彼女の来日の動機が日本女性の教育のため、と特化されたものではなかつたことや、彼女の意思とは関係ない状況の変化のためとはいへ、三〜四年間は、同志社女学校から退去しなければならぬ時期があつたことを考えると、来日当初の一〇年余 (正確には、彼女の来日一八八八年九月二六日⁽¹⁾から、第一回休暇のため、離日する一九〇〇年三月三〇日までの一一年半) は、まだまだ居場所の定まらない歳月であつた。日本という異文化の中で「校長」職に対する拘りを巡つて彼女の心は大きく揺れ、時には宣教師を止めて本国に帰ろうと考えたことすらあつたのである。

本論では、この期間に起った彼女の心の揺れや周囲との軋轢を、宣教師文書を援用しつつ検証したい。ただし、この一一年半に及ぶ、必ずしも順調でない生活、予期せぬ紆余曲折の体験は、結果的には、この期間を大変意味深いものとし、この助走期間があったからこそ、その後のデントンの同志社女子部に対する愛情（思い入れ）が深まったとも言えるのである。

以下、関連する書簡を中心に、その間の経緯を順を追って明らかにしていく。なお小論は研究上で早死にした日比恵子の後を継ぐものである。

「I」男学校での体験

一、来日までの経緯

ミス・デントンが宣教師として来日する決心をしたのは、ゴードン宣教師 (Marquis Lafayette Gordon 1843-1900) の勧めによることは早くから知られていた。²⁾ デントンが校長をしていた学校で、ゴードン家の子どもたちが世話になったことから一家と知り合いになり、夫妻から日本の京都で、キリスト教の伝道とキリスト教育のために献身している新島襄の話聞いて、ぜひ手助けをしたいと希望したという事実である。(それまで女学校に着任した女性宣教師の内、新島を助けるためという動機で日本に来た女性宣教師はデントンだけである)。

それに加えて、彼女が宣教師に大層向いている女性であることを見抜いたゴードンが、デントン来日二年前の一八八六年四月二九日に、早々とデントン推薦の書簡をボード本部に送っていたことや、デントン来日前後の事情に関しては、約一〇年前に日比恵子により検証され、発表されている。³⁾ それにより、デントンを同志社に招こ

うとしたゴードンも、それに応じて宣教師になることを決意したデントンも、当初は、同志社で女子教育に特化した教育に携わろうとの気持ちもなかったし、また同志社の側でも、その要望はなかったことが明らかとなった。

具体的に説明すると、京都ステーションが緊急の案件として女性宣教師を求めていたのは、同志社予備校のためであり、必ずしも女学校のためではなかった。予備校というのは、一八八五年新島が第二回目の外遊後に帰国した頃から、同志社への入学希望者が急激に増え、同志社英学校入学が大変難しくなったことを受けて設置された修業年限一年の学校であった。それが、後の「同志社尋常中学校→同志社中学」に繋がる学校である。この学校では、英語の授業が重視された（全授業時間数の1/3が英語）ので、自ずから英語を教える教師の必要が増大した。一方、男性宣教師の補填は難しい（Circular Letter No. 213, Feb. 18th 1887）と分かっていたので、女性宣教師の雇用が必須となったのである（『同志社百年史』通史編一 五〇一―五一六、『同志社百年史』資料編一 二九八―三〇七参照。Minutes of the 15th Annual Meeting of the Japan Mission of the ABCFM, held on Mt. Hiyelzan, Aug. 7-20, 1887）。

さて、ゴードンが最初にデントンをボードに紹介してから一年以上の月日が経過したが、その間も、デントンは女学校で教えるよりも男子校の方が向いていると考えていたゴードンは、ボード書記のクラーク (Nathaniel George Clark 1825-1896) に予備校の人材としてデントンを確保することを促す書簡を送っていた (Gordon to Clark, 1887.9.20)。

しかし、これには問題があった。実は、派遣前から、予備校でデントンが教えることに対しては、彼女を送り出しているウーマンズ・ボードが難色を示していたのである。それは、ウーマンズ・ボードの規則には、女性宣教師の役割は異教の国で女性のために働く独身女性の支援をするという条項があった（『来日アメリカ宣教師』

一二五)からであるが、京都・同志社の事情は切迫していた。そこで、ゴードンはクラークに彼女を男子校での職務に就かせるしかない事情を太平洋ウーマンズ・ボードに説明をして欲しいと依頼し、妥協策として、少なくとも最初の一年間は男子校でニコマ、女学校でニコマということに納得して欲しいと述べている。(Gordon to Clark 1888.10.2)

このことからデントンの来日目的が日本の女子教育に特化したものでなかったことが分かるであろう。

二、男子生徒との対決

デントン派遣の要請は、予備校での教師不足を補うためであったが、果たして彼女は予備校で教えたのであるか。この疑問に対しては同志社英学校の Faculty Record (FR 173. 187)を見れば、明確になる(『談叢』二六九九―一〇)。それによると、デントンの京都入りは一〇月八日であったので、学期途中ではあったが、一八八八年秋学期の途中からと冬学期は、デントンは予備校ではなく、普通学校第一学年の英語D(バートレット担当)と第二学年の英語C(ケイディ担当)を担当している。また一年目最後の春学期には、第四学年の「動物学」(and Light XIX. 430)。来日してすぐの女教師には、当時すでに二〇〇名の定員を有していた異国の男生徒(予備校生)を教えるには無理があると、現場の教師たちが判断したのである。

そのような配慮の上でのデントンの配置であったが、期間中に二年生の英語クラスの生徒より担当者変更の要求が一度ならず出されていることが、やはりFRの記録から分かる(FR 185. 196)。日比は、それがデントンに對するものでないかと推測し、理由として当時の日本社会における男尊女卑の考えを挙げている。筆者はそれに

加えて、これまで英語教育のベテランであったケイデイ教授に較べて外国人に英語を教えた経験のないデントンの教授法にも不満があったのでは、と推測する。

さらに、デントンが英学校を担当した最後の春学期、四年次の「動物学」のクラスでは、実際に熊本バンドの男子生徒たちがデントンを見くびって怒らせたことは、後になって、浦口文治（一八七二～一九四四…同志社英学校一八九〇普通科卒）が述懐している文章（『ミス・デントン』六九―七二）から証明できる。浦口は「当時、私たちはアメリカの女性教師に教えられることが嫌いだっただけです。何故なら、日本男子、日本の若者にとって、それは甚だ不名誉なことと感じたからでした」「先生は女学校で教えている生徒たちの従順な勉強態度を私たちに話されて、注意を促されました。このように女生徒と比較され、特に私たちをけなそうとして比較されると、日本男子の名誉を汚されたと感じたのでした」と記しているが、それは、当時の日本人男生徒の偽らざる気持ちであっただろう。

しかし、それまでのアメリカ時代に、小学校教育とはいえ男女生徒を平等に教えて来たデントンには全く予期せぬ反応であり、これは、彼女を面食らわせた異文化体験の第一歩になった。その結果、一年間男子生徒を教えた後の、クラーク宛書簡の中で、「日本人学生はアメリカ人とは考え方が全く違ってきますので、私の経験は邪魔にしかありません」（Denton to Clark 1899.6.12）と訴え、日本人という難しい国民性の理解に苦しんでいるデントンの姿を如実に映し出している。

三、男子校と女学校の差

次にデントンが直視せざるを得なかったのは、英学校と女学校との設備面での差であった。

一八七六年にウーマンズ・ボードがアメリカ独立百周年を記念して募金をした六〇〇〇ドルが、ちょうど京都でも女学校創立の動きが開始した時と重なったこともあり、全額が京都ホームのために寄贈されたことは大変幸運であった。その基金を基に、一八七八年に二条邸跡に建った女学校最初の校舎は、前方に御所、後方に相国寺を控えた広大な敷地に立つ和洋折衷の立派な建物であった。

しかし、京都には地元のみならず京都近郊で評判の、由緒ある「京都女学校」（一八七二年創立）「新英学校及女紅場」の後身）がすでに存在し、かつ同志社はキリスト教主義女学校であったので、入学希望者は一向に増えず、校舎新築の初年度は、四五名収容できる校舎の中に在学している生徒は僅か二〇名前後であった。その後も、一八八二年に第一回卒業生五名を出す、一八九三年までは、毎回一桁、時にはゼロのときもあったほどに卒業生は少なく、在校生も全員で三〇名前後の小さな女学校のままであった。生徒数が一挙に増加して一〇〇名を越すのは、いわゆる鹿鳴館時代（一八八三〜八七）を経てからである。

そういう状況であるから、英学校に較べて女学校の経営基盤は極めて脆く、設備の面でも遥かに劣っていた。同志社の場合、英学校と女学校の距離的近さによるメリットは、「創立時から規模において同志社英学校は女学校をはるかに凌いでいたので、たとえば、礼拝堂、化学実験室等女学校独自の設備としては持つことができなかった建物を共用できたこと」（『同志社女子大学一二五年』三四）と指摘されているが、果たしてそれは、どれほどの自由度を持って実行されていたのであろうか。再び日比の検証の結果を見ると、女学校生が男学校の施設および備品を借用できた六例が挙がっている（FR 153,156,190,204,207,247 および『談叢』一九 一三八―一四〇）。何れの場合も使用の可否は、同志社英学校教員会議の議決を経て、という手続きが必要であったことが分かる。しかも六例目の、女学校生に下村（孝太郎）（一八六一―一九三七）の授業聴講を認めるに際しては、かなりの

条件付き（日本の法律に違反しないこと、あくまでも聴講生という身分）であった。

第六例に関して、もう少し詳しく見て行こう。デントンはハリス（Jonathan N. Harris 1815-1896）宛書簡のなかで、先ず、今回同志社に寄贈頂いた莫大な寄付に対する感謝を述べ、女学生もその恩恵に浴している幸せを報告している。そこそがデントンが直接にハリスに手紙を送る理由であるのだが、現況は女学校が英学校に較べて資金も乏しく、設備もきわめて貧弱なため、理科の授業が甚だ不如意であることを説明し、そのような折も折、ハリス理化学校の建設計画によって女学生にも与えられた幸運を特筆して報告している。彼女自身、完成間近の新館を実に羨ましく見ていたこと、そして、共学禁止の法の下で、女学校生はその恩恵に浴することができないと諦めていたところ、洋行帰りの下村氏の、寛大な法解釈のおかげで、この新館の見える校舎⁴で下村先生の授業が受けられるようになった夢のような現実を語り、生徒が嬉々として授業に参加している状況を実にリアルに語っている（Denton to Harris 1890.5.2）。

しかしながら、その授業も、英学校生と同じ教科書を使うというのが条件であり、その結果、女子生徒の知力が男子生徒よりも劣っているという侮蔑的理由で、暫くの間⁵だけでキャンセルされたとホワイト（Florence White 1846-1931）「校長」は怒りと共にクラークに報告している（White to Clark 1890.5.29）。その顛末を巡ってのデントンの書簡は残されていないが、この出来事を通して男女の不平等を体験したデントンの口惜しさが想像できる。

〔Ⅱ〕自身への失望

前項では、主として異教の国、日本国内で遭遇した男女差別に対するデントンの違和感を追ったが、実は、他者ならぬデントン自身が、派遣宣教師として異国で暮らす際に必要だった要件は十分に充たされていたのだろうか。

一、「日本語は絶対に覚えられません」

デントンの日本語の下手さは、終生にわたって語り草となっている。「リンゴの着物、サヨナラ下さい」「鶏のお子さん、割ります」というユニークなデントン語録が笑い草と共に受け入れられるようになるには、長年の歳月を要したのである。

日本到着後、どの宣教師にも課されたタスクは伝道に必要な日本語の習得であったのだが、デントンの場合、もともと苦手な日本語習得に加えて、日本語学習の前に出会ったハイレベルの日本文化が障害になったと言えないただろうか。それは横浜に着いた直後、神戸に行く船の都合で一週間余東京に滞在することになった時の経験である。デントンは横浜でグリーン博士 (Daniel C. Greene 1843-1913) の妹、ルミス夫人 (Mrs. Henry Loomis) と会った後、東京に出て、パサデナ時代から知り合いであったストレイト夫人 (Mrs. Henry Straight) 宅 (東京高等女子師範学校構内の社宅) に滞在した。

その最初の夜に、デントンはストレイト夫人と共に、東京大学哲学教授アーネスト・フェノローサ (Ernest Francisco Fenollosa 1835-1908) から夕食の招待を受けた。教授と夫人は日本の古典芸術だけでなく、版画に関

しての興味も共通の間柄であり、その夜は遅くまで、デントンもフェノローサ家で収集されていた東洋の文物を鑑賞する機会に恵まれた。

それは、ミス・デントンの東洋美術との幸せな遭遇であり、開眼であつた。そこでデントンはアメリカにいたときには想像もしなかつた、高度の日本文化に対する敬意を直感的に抱いたのである（『ミス・デントン』二一九）。その折の、あまりにも高度な日本文化との出会い、それを理解出来たデントン自身と、その高さに到達するため
の日本語学習との膨大なへだたりのために、初歩的な日本語学習の現場でデントン自身が感じた焦りと挫折感
は強大であつただろうし、その裏返しの結果が、もともと不得手であつた日本語学習に際する絶望を増幅したの
かもしれない。

来日直後、日本語学習を開始した時の苦手意識が相当のものであつたことを示す言葉が何通かの書簡の中に出
ている。先ず来日一ヶ月くらい後の第二信で、

大体、任地で、新しい言語を習得する最初の一年は自信をなくすことが多いと思いますが、日本語という複
雑で難解な言語には心が折れてしまいます。（Denton to Clark 1888.11.14）（太字坂本。以下引用書簡中の太
字は全て坂本である）

と大変さに消沈しているさまを告白し、さらに七カ月後には、

私のように、語学を不得意とするものは、日本語のような難しい言語に挑戦すべきではなかつたのです。（中

略) 日本語は絶対に覚えられません。(Denton to Clark 1889,6,12)

と断言さえしている。

デントンが周りで日本語を見事に操りながら伝道に励んでいる同僚の宣教師を見て、自分も早く役に立ちたいのに、それができない苛立ちに相当悩まされていたことが想像できる。

その結果、同じ書簡のなかで、ボードのクラークに提言して「来日する女性宣教師のために日本語の読本を四冊送るから、出国前の彼女たちに持たせ、船中で協力してくれそうな日本人を探して、数の数え方を覚えたり仮名くらはいば学んで、船上の退屈な時間を紛わせる」べき、と言っている。ほとんど個室にこもって過した彼女の二週間半の船上生活 (Denton to Clark 1888,10,22) が、もし着任前の準備期間と位置付けられ日本語習得に励むという目標があったなら、少しは過こし易かったのではないか、また初めて訪れる東洋の日本での任務に対する不安も、少しは解消できたのではないかと想像したのかもしれない。

二、聖書の勉強不足

日本語学習に自信を持てなかったデントンに追い打ちをかけたのは、聖書の知識の不足であった。当時女性宣教師に許されていたのは、教育、直接伝道、医療の仕事であり、男性宣教師のように、牧師となって教会を設立したり、聖書翻訳に携わることではなかった。出国前に聖書や神学の勉強をする事は必要条件ではなかった。それが、来日八カ月後の意外な機会に、デントンの前に後悔となって立ち現われたのである。

異教的なものを我慢する助けをたつた今一つ見つけました。それは昨夜、イザヤ書一章を勉強していた時でした。

と唐突に書き始められた書簡 (Denton to Clark 1889.6.12) の中で、「火曜の午後七時から八時の間に、三人の別課神学生がデントンの部屋に聖書の勉強に」来た時の様子を伝えている。別課神学科とは、同志社の神学科の余科で神学教育を受けた卒業生とは別に、伝道者を短期で育成するためのカリキュラムが組まれた学課であった。一八八七年に「基督教ノ教師ヲ養成スル為メ邦語ヲ以テ神学ヲ授ク」(『同志社百年史』通史編一 一三〇) ために設置された速成神学科の後を継ぐ課程であり、入学以前にすでに社会経験のある学生が多かった。デントンは、この別課神学生たちと聖書研究会をしていたようであるが、イザヤ書を読んでいた時に、「イザヤの素晴らしい予言に、あまりにも素直に大きな喜びと興味を示した」若者たちに対して、デントンは驚喜し、さらに詳しく聖書の奥義を解説しなかったであろう。しかし、別課神学生のように伝道の即戦力となるために神学を専門的に学ぼうとする学生との学習においては、本国ではかなり聖書に通じていると言われていた彼女の知識程度では、力不足であった。ここでは、彼女の日本語能力の問題というよりは、語るべき内容のことで、自分に失望したのである。そこで半分ユーモア、半分惨めさを交えて、「あらゆる知恵を持つソロモンでさえ、日本に住んでいと辞書を探さないといけないでしょうに」と、自らの知識の不十分さを語り、もつと多くの聖書の補助教材、簡略版でない辞書、百科事典、そして教科書が必要だと声を挙げている。デントンは聖書に関する自分の実力のなさに気付き、「アメリカ時代数ヶ月でも何処かの聖書学校に行つておいたらよかつたのに」と勉強不足を悔いるのである。

三、高等教育を受けていないこと

さらに、デントンは自分が高等教育を受けていないことを気にし始める。いわゆる一八七〇年代に宣教師志願をする女性と違って、この時期に来日する女性宣教師の多くは、アメリカにおける女子高等教育の進歩と共に、女子高等教育機関を卒業してから来日していた。

それに対し、デントンが幼年時代を過ごしたのが西部であったこと、家が貧しかったので、家庭教師をしたり、途中で学校を中退して働くなどして学資を貯めながら、学び続けなければならなかったこともあって、いわゆる専門学校どまりであった（最終卒業校は、ポストン・カレッジエート・スクール）。来日前は、小学校の校長をしていたのであるから、そのために必要な資格試験には合格していたのであろうが、それは大学卒の学びの内容とは異なっていた。

それは女学校で様々な科目を教えるにあたって、マウントホリオク、スマス、ウエルズリー、プリンモアなどの女子大学で学んだ後に、宣教師として赴任する女性宣教師たちほどの専門的、かつリベラルアーツの教養が身につけていないことを意味し、後々までもデントンの教える科目の制限となった。その結果、長年にわたる同志社女学校の教師生活の中で彼女が受け持った科目は、最初の内の初等教育の場ではさまざまに教科を教えたが、最終的には料理と聖書と英語に集約され、しかも英語の授業では、基礎的なペン習字や週一回提出のレター・ライティングや、人前で話す独立話の訓練に終始して、いわゆる英文学関連の講義をすることはなかった。

その代わりに、デントンは生徒の生活面での指導、例えば、強引ともいえるやり方で、生徒を礼拝に出席させるなどの熱意と行動力で補い、彼女自身の生活態度で無言のうちに示したキリスト教精神に基づく人格教育の実践を通して、生徒たちには生涯にわたる感化を与えたのではあるが。

「Ⅲ」デントンの大きな挫折

一、「校長」職に対する懼れ

デントンが女学校の専任となり、寮に住み込んで女生徒と共に毎日を過ごすようになるのは、一八八九年の秋学期からである。

その当時の女学校は、一八八八年二月に、デントン同様、同志社の予備校で教える予定で来日していたホワイトが、同年九月から「校長」の職に就き、彼女の力で運営されていた。前任のクラークソン (Virginia A. Clarkson 1850-1940) 「校長」が、急に英学校教師であったケイディー (Chauncey M. Cady 1854-1925) と結婚退職することになった結果の措置であったが、ホワイトは来日前にミルズ・フィメール・セミナーで教えていた経験もあるので、周囲も本人も納得の人事であった。しかし、当時女学校にフルタイムの教師として在籍していたのは、彼女の他には、音楽専門のウェンライト (Mary E. Wainwright 1862-1918) だけだったので、ホワイトはしきりにボード本部に教師の補充を訴えていた。従って、男子生徒との折り合いの悪かったデントンが、男子校から手を引いて、女学校専任の教師になることは、女学校にとっても、女性宣教師を支援しているウーマンズ・ボードにとっても、好都合な配置であったと言える。

しかし男学校で教えた経験から、デントンには、男尊女卑の思想の下、特に女性の人格を認めようとしない日本の社会の中で、そのような異文化理解が出来ないまま、女性が責任ある地位に着くことの大変さ・怖さは十分に予測ができていた。

一八九〇年五月五日のクラーク宛書簡のなかで、デントンは書いている。

私は最善を尽くしてホワイト「校長」を助けようとしていますが、この方面での私の経験不足のせいで、あまり役に立っていません。リチャーズさんやホワイトさんのような新人宣教師を責任ある地位に付けるのは大きな間違いですし、二人がこの点で犠牲になっておられることがとても悲しいのです。周りの宣教師の方たちの多くは私が義務を逃れていると思つていて、仕事の持つ眞の価値を慮るあまりに、この独特の文化を持つ国民のことを十分に知るまでは、自ら責任を引き受けるのは待とうという気持ちになります。

デントンが来日前に、バサデナで小学校の校長をしており、その責務を十分に果たしていたことは、彼女を推薦したゴードンの書簡からもうかがえる。にもかかわらず、彼女は「この方面の経験不足のせいで、あまり役に立っていない」と言い、「この独特の文化を持つ国民のことを十分に知るまでは」責任ある地位に就くことは控えたいと主張しているのである。このあと六〇年間ずっと日本社会に住み、ある意味、日本人以上に日本人になったと評されるデントンの言葉としては、大変意味深いものがある。結果として、来日してすぐに責任者となった二人―看病婦学校長となったリチャーズ (Melinda A. J. Richards 1841-1930) と同志社女学校「校長」となったホワイト―は、共に精神的ストレスからブレイクダウンし、仕事半ばで帰国を余儀なくされることを思うと、デントンの懼れは的を得ていたことになる。

デントンにとって、着任後の一年間、男尊女卑の思想に固まった日本男児と出会い、格闘したことは、決して無駄な苦労ではなかったと言える。

二、ホワイト「校長」の大病を巡って

前節で述べたように、ホワイトは来日後、半年もしないで女学校の「校長」職に就いたのであるが、女学校生徒との出会いは期待以上であり、大きな喜びであった（『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（一八七六一—一八九三）』下巻 二八—二九）。学校の経営権を巡って「大変難しい所」と評判であった同志社女学校も、最初の女性宣教師スタークウェザー（Alice J. Starkweather 1849?）以来一〇年余のキリスト教女子教育が少しずつ実を結び、生徒たちは順調に成長し、かつ日本女性の洗練と上品さ、つつしみ深さを身に付けていた。

この国の文化や芸術の進歩をみるときに、私には日本人が「異教徒・非キリスト教徒」とは到底思えません。確かに「キリスト教徒」ではありませんが、「非文明人」ではないのです。（White to Clark 1888.10.30）

と、日本の文化、日本女性を讃え、これからも一層宗教教育に力を入れる一方で、同志社女学校を女子の高等教育の場にレベルアップするための新しいカリキュラムを考案するなど、前途洋々に見えた。

しかし、彼女の目前に立ちだかかったのは、女性の自立を妨げる、日本古来の男尊女卑の考え方であり、教員会議での、彼女の「校長」としての発言を尊重しない男性教師たちの姿勢であった。さらにハリス理化学学校設立時の下村孝太郎教授の善意とは別に、女学校生の知性は劣等であるとして女生徒の聴講が中止されたこと、学園同志社内、女学校は男学校のアネックスでいいとみなす風潮等のストレスのために、とうとう身体を壊し、強度のインフルエンザを患う結果になった。⁽⁷⁾

ホワイトは来日時の年齢が四三歳という高齢であったこともあり、その症状は医師でなければ到底処置するこ

とのできない痙攣や引き付けを起こし、六週間に及ぶ闘病生活の末に、左半身に麻痺を残したまま一八九一年六月に急遽帰国するという結末を迎えた。デントンの懸念した日本という土壤の中での「校長」職に就いた女性へのプレッシャーであったと言える。

この、実質は六週間だが、予後を含めて半年近くの間、デントンは教えることとホワイト「校長」の看病を、同僚のウエンライトと共にやり遂げた結果、女学校内でのデントンの評価は高まり、かつ自らに対する自信が生まれたに違いない。同じホーム内で、ホワイト「校長」の過酷な病状を見聞することになった女学校の日本人教師たちも生徒も一丸となって協力し、最終的には結末感、繋がりを強めることとなった。特に女生徒に関して、デントンは次のように伝えている。

女生徒たちは大きな慰めでした―看病の手伝いをしたがり、ひたすら祈り、とても穏やかで、我慢強くしていてくれました―すばらしい生徒に恵まれました。彼女たちはとても信頼できる働きをしてくれ、聡明で、熱心で、信仰深いので、私自身の弱さを思うと恥ずかしくなります。この病気に纏わる全てを通して、クリスチャンとしてこれまで経験したことのない神の助けをずっと感じておりました。(Denton to Clark

1891.2.21)

デントンはこの間、「校長」の代役も含めて、この急場を乗り越えたことを通して、これまで警戒していた日本という土壤にも少しずつ馴染み、日本人の中で働く自信、一体感を味わったのではなかっただろうか。ただ、本人は意識しなかったかもしれないが、肉体的疲労も極度に達していたのである。

そこに舞い込んだのが、仙台ステーションで働いていた宣教師マイヤー (Mathilde H. Meyer 1852-1927) の、ホワイ「校長」後任の人事であった。この人事はマイヤーにとっても、デントンにとっても全く予期せぬことであった。

三、デントンの乱心

(一) マイヤー「校長」の招聘

デントンが日本の社会の中で、女性が責任ある地位に着くことに慎重であったことは前述した。しかし、ホワイ「校長」大病事件後のデントンの「校長」職に対する思いは、かなり違っていたと言える。つまり、自分が「校長」職に不適任と評価されることは、もはや我慢のならないことであり、それ位なら、もう宣教師を止めて本国に帰りたいと断言するまでに変わっていたのである。以下に、経緯を述べる。

ホワイ「校長」の後任として、京都ステーションから指名され招聘を受けることになったマイヤーとは如何なる人物であったか。彼女は本来、専門的な語学教師（アメリカで師範学校を卒業した後、ドイツとフランスに留学してそれぞれの言語を学び、帰国後は本国で八年間、ドイツ語と古典語の教師）であった。その後、アメリカン・ボード宣教師に応募して一八八七年一〇月に来日し、東華学校^⑧で英語・ドイツ語を教えていた。彼女の計画は、日本（仙台ステーション）で五年間働いた後、一年間の休暇を取って将来のことは改めて考える、であり一八九一年度という年は、いよいよ最後の一年間を、今まで通り、楽しく気持ちよく（「女性であるがためにいやな思いをしたことは一度もなく、男子生徒たちも熱心で聡明で、礼儀正しかった」『女性宣教師「校長」時代』下巻 三四）、東華学校で過ごしたいと考えていた。それ故、この突然の招聘は全くの驚きであり、応じたくな

いものであった。その考えは仙台ステーションの日本人理事も同じで、和田正幾（一八五九―一九三三）校長代理が交渉のため京都まで出向いたが、その案を覆すことは出来なかった。

その上、マイヤーは来日前から、「校長職に就くこと、寮に住んで学校の全責任を持つ」という形で仕事をする事は極力避けてきた」(Meyer to Clark 1891.10.25) こともあり、どうしても京都に行かなければならないとしたら、デントンこそ校長に相応しいと思うので、自分は彼女を助ける役で派遣されたいと、J・D・デイヴィス (Jerome D. Davis 1838-1910) とデントンに手紙を書いていた (Meyer to Clark 1891.8.4)。さらにマイヤーには、この時期特に同志社女学校の「校長」に派遣されたくない理由として、①日本の女子教育の先行きに対する不安があった。②に関しては、ちょうど日本全体が、これまでの行きすぎた西洋化に対する反動期でもあり、一八八九年の大日本帝国憲法に続いて、一八九〇年には教育勅語、訓令一二号が發布され、とりわけ女子教育及び西洋的カリキュラムに対する牽制が強まっていたこと、その結果、全国的に中等教育で学ぶ女生徒数は減少し、キリスト教主義を標榜することを止める女学校も続出するという現象が起っていたからであり、②に関しては、新島の死後、同志社内部では、アメリカン・ボードへの報告書を巡って宣教師と日本人教師との間に険悪な空気が漂い始めていること（『同志社百年史』通史編一 四三三―四四九）を察知していたからである。

しかし、デントン「校長」案には、ミッションも京都の日本人教師たちも、全員が反対した結果のマイヤー招聘であったのだが、この決定はデントンにとって納得のいかないものであった。ホワイト「校長」の大病の期間も、献身的に看病しつつ同志社女学校の教育を担った実績からも、次の「校長」は当然自分であると考えていた。それ故に、従兄の死で帰国を余儀なくされた (Learned to Clark 1891.10.15) 時も、とんぼ返り⁹⁾で京都に帰って

来たのである。

私には日本で仕事が待っていると考えて帰って来ましたが、学校に着いて二時間もしない内に、私の間違いに気が付きました。(中略) 私には事態がよく分かっていなかったのです。ああ悲しい！男性は自分の価値を過大評価することがよくあります。だったら、女性が、時に自分にも価値があると思っても許されるのではないのでしょうか。他の人が私のことを邪魔者だと思っていたとしても、です。(Denton to Clark 1892.2.29)

「日頃からデントンの働きや書簡を最高のものと評価していた」(Clark to Denton 1892.3.31) クラークには、この書簡の中で語っているデントンの悲嘆の原因が皆目想像できなかつた。その上、「書き手が多くの心労で疲れ切って神経が完全にブレークダウンし、それがたつた今、何かによつて悪化したとしか思えないような文章で書かれていた」(Clark to Learned 1892.4.1) ので、クラークは書簡を受け取つたその日にデントンに手紙を書いて、これまでの彼女の働きを讃え感謝して、周りとうまくいかないなら、京都以外に働く場所はどこにでもあると彼女を慰め励ました。その上、デントンは宣教師を止めるとは一行も書いていないのに、虫が知らせたのか、文の途中で My dear Miss Denton と呼びかけて、あなたが止めるなんて考えられないと案じている。最後には、ともかく今は十分休養してホワイト「校長」の看病の疲れを癒し、一日でも早く元の快活で陽気なデントンに戻ってくれることを、主のためにも、これまであなたが素晴らしい働きをした日本の女性のためにも祈っていると締めくくっている (Clark to Denton 1892.3.31)。

そして翌四月一日にはラーネッド (Dwight W. Learned 1848-1943) に「秘」として書簡を送り、デントンから受け取った書簡の内容に関して状況が皆目つかめず大変心配していること、先にホワイ特「校長」のすさまじい病気の期間の報告を聞いていただけに、デントンの疲労が気になる。どうかあなたの裁量で出来ることは何でもしてデントンの苦境を救って欲しいと、彼女を氣遣うあまり、過度に私情を交えていると思えるほどの文面で特別な処置を依頼している。そして、そちらで決まったことは、本部では何でも受け入れて処置するからと続け、ここでも異例の、分を越えた対応を示唆している。

(二) 京都ステーションの対応

それに対して、信頼するラーネッドからは、全く予期せぬ書簡 (Learned to Clark 1892.5.5) が届くのである。

デントンの反抗がなければ、女学校は大変いい状態で推移しているのです。マイヤーはあらゆる点で有能な女性です。デントンは優秀でよく働く教師で、ウエンライトは専門の音楽の分野でよい仕事をしており、全体的に日本人と外国人との関係も実に仲良く協力し合っております。問題は、デントンとマイヤーがこれから共に働けるか否かに懸かっています。(中略) デントンはマイヤーの下で働くことをどうしても受け入れようがありません(宣教師の間に上下関係はないのですが、マイヤーが女生徒全体の監督の任にあるので、もし「校長」という立場があるとすれば、それはマイヤーが担うこととなります)。なお、日本人もデントンが教師としては優秀であることを認めるけれども、「校長」職には不向きだと強く感じています。

マイヤーのすることが時にデントンにとって腹立たしいことがあるかもしれませんが、問題点は矢張りデントン

トンの側にあると言わざるを得ません。それが、彼女の体調のせいにして生来の性質のせいにして、です。デントンが従弟に付き添って帰米し、再来日した時にも、J・D・デイヴィスとアルブレヒト (George E. Albrecht 1855-1906) と私「ラーネッド」からなる女学校の諮問委員会^⑩はスチュアート (Nina C. Stewart 1868-1927) と交替して岡山に行くように勧めたのですが(そうすれば、デントンは責任者になれるし、スチュアートはマイヤーの下で働くことを少しも嫌がらないのですから)、「デントンは京都を去るという考えに頭から反対でした」。しかし「主教」のような制度を持たない会衆派の委員会では、当事者が賛同しない限り、どうしようもないのです。このような状況が続くと、一番心配なのは、マイヤーが辞職して離日することなのですが、デントンも帰国するかもしれません。

と複雑な状況を説明し、マル秘ということでもあるので、近日中にデントンと直接話してみる心算と、ひと先ず報告していた。

そして、あまり日をおかずにデントンと面談した。その時の彼女の態度は、実に反抗的で、八月には仕事を止めて帰国すると、断固として言い張っていると伝えた上で、ラーネッドはもはやこの問題を内々で収めることは無理と判断し、諮問委員会で話し合い、その結果を正式に同委員会からクランクに報告したのである。(D. W. Learned, J. D. Davis, Geo. E. Albrecht to Clark 1892.5.9)

それによると、

①デントンとマイヤーと一緒に住んで、二年目を共に働くことは無理である。二人共表面的にはさりげなく振舞っているが、実情を知っている委員会としては、二年目の継続を認めることは出来ない。この点に関

する当方の決断は尊重して欲しい。

② これまでのデントンの誠意や働きは十分に認め、大いに感謝するとしても、今の時点ではマイヤーの働きの方がもっと大切で、なくてはならないものであるし、今の状態で、デントンをその位置に付けることは到底出来ない。この決定は、全く学校のことを考えて下したものであって、デントンのこれまでの働きを軽視するものではない。

③ 以上のことは、現在のデントンの、極度の心身の疲労を意味しており（そうでなければ、彼女の言動は許容できない）、当委員会としては、彼女の完全なるブレークダウンを心配している。以前から一年間の本国での休暇を勧めているが、彼女が肯んじないので、そちらから今年の夏は休息のために帰国するよう強く勧めて欲しい。

と三項目に分けて、デントンを巡る問題点を伝えた後で、追伸としてラーネッド個人の気持ちも書き添えている。

ただし、デントンの立場に立つてこの問題を考えると、ミッションとステーションがマイヤーを勝手に「校長」の地位に付けておいて、デントンに休息を取るよう勧め、彼女が誠心誠意関わって来た同志社女学校を離れて、別のステーションに移る様にという勧告は、彼女の京都での仕事が失敗だったと証するものであり、そのことがオープンになるのは耐えられないので帰国したいというのではないかと想像します。その結果、彼女の抛りどころである信仰までも取り去られないかと心配です。

と書き、また諮問委員会で決めたことと同じような説明を繰り返しているが、ラーネッドにとつても、やりきれない心境だったであろうことがうかがえる。

そして、先便の数日後に開かれたミッシヨン・ミーティングで、ステーションの投票権を持つもの全員が票決した結果、全会一致で、ミッシヨンに提出されていたマイヤーの辞職願を退け、「校長」職に復帰して貰うことになったとクラークに報告された (Learned to Clark 1892:527)。それに加えて、デントンに関しては、公式の票決はされなかったが、彼女が学校を出る必要は全員に認識されているので、マイヤーの助け手を急いで見つける必要が話し合われたこと、その席上、タルコット (Eliza Talcott 1836-1911) の発案で、ラーネッドの妹 (二八歳で大学卒、ポーターの学校で教師をしている) の招聘が組上に載せられたことも報告された。

四、クラークとデントン

さて、クラークはラーネッドから立て続けに送られてくる、デントンに関する京都ステーションの正式文書を読んで、デントンの錯乱状態に大いに心を痛めながらも、もう自分の出る幕ではないと覚悟をしたのか、一八九二年六月一日付ラーネッド宛書簡では、デントンとマイヤーの件は貴下の賢明で思慮深い解決に任すと返事している。しかし、デントんに必要な六カ月〜一年間の休暇は願い出さずれば、いつでも取れるように手配して待っていると付け加え、五日後の六月二〇日には、デントン自身にも同じことを書いて、一年の休暇を取るために正式の申し出をするようにと促している。

しかしながら、「二人が一緒に働くことは到底出来ない」と周囲が懸念していたマイヤーの二年目 (一八九二年九月〜一八九三年六月の三学期間) に、京都ステーション全員の認知にもかかわらず、また、自らが八月には

ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで一来日後一〇年余の紆余曲折を経て一五四

帰国すると宣言していたにもかかわらず、デントンは京都ステーションで働き始めた。そのことは、五月のステーション・ミーティングの決定から約二カ月後に、京都ステーションのメンバーが渋々とデントンの復帰に同意したことによる。⁽¹³⁾

クラークは彼女の復帰が確実となった一二月ごろから、再び毎月のようにデントんに書簡を送り始める。主目的はアメリカ各地からアメリカン・ボード経由で送られて来るデントン宛の献金を知らせることであったが、その都度、少しでもいいからあなたの健康状態を知らせて欲しいと繰り返して頼んでいる。そして、あなたは疲れているのだから最低一年は休むようにと勧め、あなたが他人に対して示す無私の親切を、自分の健康と体力にも向けて欲しいと書き（一八九二年一月二日）、あなたが返事をくれないのはテーブルの上に置き忘れていていないかとジョークを交えて返信を催促する（一八九三年二月二日）のである。これほど心のもった愛情あふれる口調のクラークの書簡は例外的と言っている。さらに、出過ぎたことをしていると思わないでと断った上で、マイヤーと一緒に働く上でのアドバイスを書いて、励ましている。

前にも申し上げましたが、仕事は分担をすることが大切です。その上で、お互いの仕事には干渉しないで、それぞれが考える一番いい方法で自由にすることを勧めます。（中略）強い性格の人同士は必ずしもうまく行かないと言われますが、京都には、そのように強気な女性が二人必要なでしょう。（Clark to Denton

1893.2.2)

この書簡に対する直接の返事ではないが、それから一カ月後の三月七日付で（宛先は無し、Miss Mary Florence

Denton writes となつてゐる)、献金者宛のお礼状が残つてゐる。その中で、お送り頂いた献金の使い道は、教師の給料・書物代・伝道や経常費補填のため・生徒の奨学金等いろいろあるが、生徒の奨学金に使わせて頂くの一番と書いた後、現在、彼女が携わつてゐる仕事について記してゐる。

それによると、今、デントンは市中伝道に精を出して日曜学校を三つ始めてゐること、その内の一つは、クリスチャンの生徒が先生になつて学校の中で開いてゐるが、先週は一〇〇人も子供が集まつたこと、ハリス理化学校の男子生徒といっしょに一種の大学セツツルメント(隣保館)を始めようとしてゐることを報告してゐる。先の手紙にあつた、仕事を分担すること、すなわち、女学校内部の仕事はマイヤーが引き受け、デントンはもともと得意であつた市中伝道に精を出してゐることが分かる。そして、最後に祈つて欲しい、祈ることにおいてのみ、死に物狂いの戦いを戦うことができると書いてゐるが、誰もが無理だと言つてゐたマイヤーの下での二年目を、デントンは祈りに支えられて、やっと歩んでゐると痛感してゐたのかもしれない。

クラークは一八九三年の年会で引退を表明し、翌年の年会でバートン (James L. Barton 1855-1936) とバトインタツチするのであるが、辞職間近にデントンに宛てた書簡 (Clark to Denton 1894.5.7) の中で、マイヤー帰国後のデントンを氣遣つて、あなたの助けをする、もう一人女教師が必要なら、相応しい人を探すには時間が必要なので出来るだけ早く知らせるようにと書き送つてゐる。

本論の中でもこれまでに何度か触れたが、デントン宛書簡に顔を出す、クラークおじさん^①の優しさがここでも感じられる。クラークにとつて、デントンは多くの女性宣教師の中でも掌中の珠のように愛おしい存在であり、アメリカン・ボードを引退する間際まで、特別に心にかかる女性宣教師の一人であつたのだろう。

〔IV〕同志社を出て

一八九四年一月に同志社女学校「校長」としての二年間の勤めを終えて、マイヤーがヨーロッパに旅立ち、女学校は松浦教頭⑮の下に、デントンとベネディクト (Harriet M. Benedict 1856-1938) が協力をして、新しいスタートを切っていた。

同志社女学校にとって大変心強かったのは、前年の六月に卒業生数が一〇〇人弱になったのを期に、卒業生を集い「同志社女学校同窓会」が発足したことであった。「生徒に甘すぎぬ」(Learned Davis, Albrecht to Clark 1892.5.9) と評判のデントンであったが、同じ建物の中で暮らし、キリスト教教育に基づいて親身の世話を受けた女生徒たちは、今度は、自分たちが母校に奉仕をする番が来たと認識し、恩師松浦とデントンを支えるべく力を発揮し始めていた。具体的には、同窓会の事業として、新島文庫(女学校図書館)の拡張と機関誌『同志社女学校期報』の発行を決め、かつ、女学校基本金の募金を開始したのである。

そこに、マイヤーが危惧していた同志社騒動⑯の波が押し寄せてきた。最初の内、それは英学校の内紛で女学校には及ばないと考えられていたが、いよいよ一八九六年にアメリカン・ボードと同志社間の交渉が決裂し、外国人教師一斉辞職となるに及んで、デントンたちも学校を退去せざるを得なくなった。ここで同志社英学校も女学校も、創立以来初めて、外国人教師が一人も在席しない三年余を迎えることになる。⑰特に英学校に比べてスタッフ数も少なく、また寮での生活を通してキリスト教の感化を与える教育を大切に出来た女学校においては、女性宣教師不在の影響は大であった。『同志社女学校期報』には、この間の混乱を巡ってさまざまな手当てがなされた様子が記録されている(『期報』七 五―七)が、今は女学校を出た後の、デントンの足跡を探ることとする。

この三年余を、彼女は京都、東京、鳥取で過ごすことになるのだが、順を追って、それぞれの場で発揮されるデントンの流の働きに注目する。

①京都（一八九六年九月〜一八九七年四月）約七カ月

男性宣教師たちは、これを機会に自分たちがこれまで十分に組み立てていなかった直接伝道、とりわけ地方伝道に従事する一方で、後にJ・D・デイヴィスが校長になって運営される「福音学館」(Gospel School)を作って、牧師養成の継続を計った（『京都のキリスト教』三〇五〜三一一）。それに対しデントンは、一八九六年九月には女生徒四名を連れて女学校内の宿所を出て、梨の木町のベリー (John C. Berry 1847-1936) 宅に移り住んだ。その内三人は幼稚園の仕事、一人はデントンの助手（「松田幸」『期報』七）として働き、その他に、刺繍を習いに來ていた女生徒が二名いた (Denton to Barton 1897.23)。

デントンはもともと学外での伝道活動（日曜学校や女性を対象とした教室）に積極的に関与していたので、その活動を活性化することは容易いことであった。教室の校名を当時の校長小崎弘道に因んで「弘道館」と名付け、そのための予算、三四七ドルを早速ボードに請求し、かつ、実際の活動報告をしている (Denton to Barton 1897.23)。今のところ、弘道館の仕事を専任とする福音伝道者がまだ見つかっていないので、最高の働きは出来ていないが、すでに、「英語の授業」「訳読のクラス」「聖書研究会」（英語と日本語一クラスずつ）を始めており、どのクラスも生徒は少人数であるが熱心に勉強を続けていること、さらに、日曜夜の働く婦人の会にも大勢の女性たちが集まっており、日曜学校もどんどん大きくなっていることなど、学校を出てからも伝道活動に勤しむデントンの姿が彷彿される内容である。

社会に出て見ると、熱心にキリスト教の教えに耳を傾ける人も多く、自分はラーネット夫人 (Florence H. Learned 1857-1940) とともに幼稚園「出町幼稚園」¹⁸⁾を始めたこと、場所は賑やかな町の外れの一角で、比叡山の麓の村への入り口となつていたので、場所的に便利である。近い内にウーマンズ・ボードに幼稚園のための資金援助を願う積りであるが、もしバイブル・ウーマンや福音伝道者のための基金があれば、市中伝道の機会はいくらでもある。またいっしょにいる女生徒も全員が日曜学校の教師も務めており、週に二回は近所の六〜七人のお手伝いさんに「読み・書き・そろばん」を教えていると活気に満ちた報告をする一方で、同志社の問題は私たちにとっても大変残念なことであり、学校を出るのはどんなにか辛い思いであつたが、女学校教師は理事会の決定事項に抗うことは何も出来なかつたと、同じ書簡の中で、バートンに悲しみを訴えている。

②東京 (一八九七年五月〜一八九八年一二月) 約一年半¹⁹⁾

そこに急に東京での働きの場が与えられた。グリーン一家が賜暇休暇で帰国することになり、彼の東京での働きをデントンが担うことになったからである。グリーンの家は東京市ガ谷中野町二二であつたが、そこは、同窓会東京部会発足の場となり、その後もデントンが在京の間、三回にわたつてグリーン宅で東京支部会が開かれていた。

その間にデントンが認めた書簡が一通だけ残っているが、宛名は Dear Sisters all で、タイトルは「アメリカ在住の日本人に伝道を！」である。内容は、東京に来てみるとアメリカ留学経験者の政府要人が多数いるのに、クリスチャンはほとんどいない！ミシガン・イェール・ハーバードなどの名だたる大学の学位保持者の留学中になぜ伝道をしないのか、ここ異教の地、日本でもよりも遥かに容易である筈なのに…と、デントンはアメリカ女性

に熱烈なエールを送っている。

この時期デントンは、番町教会を足場にして、グリーンの主導した社会福祉事業にかかわっていた。一つは一八九七年に東京神田区三崎町に設立されたキングスレー館⁽²⁰⁾への協力であり、もう一つは私立二葉幼稚園（一九〇〇年）開設のための募金活動であった⁽²¹⁾。この幼稚園の設立者の一人、野口幽香は番町教会員であり、東京女高師時代に学んだフレーベルの幼児教育を実践しようとしていた。二つとも番町教会に直接関係した伝道事業ではなかったが、キリスト教伝道に関係する活動なのでデントンは積極的に応援したのである。

その他に、東京在住中に柏木義円が牧する靈南坂教会でも婦人対象の講演をしている。講演題は「聖書研究の必要」であった。デントンにしてみれば、同志社に着任して間もなく別課神学生と共に学んだイザヤ書の聖書研究以来、異教の国日本で聖書を熟読する必要を感じており、そのことについて、是非とも婦人たちに語りたかったのであろう。デントンは英語で話して柏木が通訳をしたのであろうが、談話の概要として掲載されているので、文語調の堅い文章になっている（『基督教新聞』1898.5.27）。しかし、原稿を残すことの少なかったデントンの貴重な資料の一つである⁽²²⁾。

この一年半に及ぶ東京生活は、デントンにとって直接に関係した伝道活動だけでなく、首都東京ならではの社会面・文化面でも大きな刺激となった。また、来日後すぐに紹介されて日本美術への開眼の手引を受けたフェノロ・サ夫妻との交流が深められたことは、何よりも恵みであった⁽²³⁾。さらに、同志社騒動のために、女学校のキャンパスからは立ち退かねばならなかったが、そこで育まれた師弟の繋がりが、同窓会東京支部を起こした卒業生との接触を通してますます深められたことは、デントンにとって、多きな慰めとなったに違いない。

③鳥取（一八九九年一月～一八九九年二月）約一年

グリーンが賜暇休暇を終えて帰日したので、デントンは東京を離れて、本来行くべきであった鳥取に赴いた。そこには、デントンにとって家族同様のバートレット夫妻 (Samuel C. Bartlett 1865-1937, Fanny S. Bartlett 1874-1963。妻のFannyはデントンがパサデナ時代に出会ったゴードン家の長女) がいたので、是非とも行って伝道の手助けをしたいステーションであった。

鳥取時代のデントンの動静を伝える書簡は三通ある。一通目は、一八九九年一月一日付の書簡で、神戸から発信されたもので、今から鳥取に向かうが、ミッションが許してくれるならば、せめて三月末までは鳥取にいたいとの願望を述べている。第二便は鳥取発信 (Denton to Barton 1899.4.25) であるが、内容は、ミス・ラーネッド (Grace W. Learned 1876-1962) が同志社に帰任出来なかったことを耳にしたデントンが、人材不足を補うためにミルドレッド・ミンター⁽²⁴⁾を強く推している書簡であり、鳥取の現況については何の言及もない。そして第三信 (Denton to Barton 1899.9.15。賜暇休暇前、最後の手紙⁽²⁵⁾) で初めて、夏休み中に丹後、但馬、宮津、福知山といったアウトステーションの伝道旅行に出かけたことに触れ、まだまだキリスト教が浸透せず、封建色が色濃く残っている地方のこと、とりわけ鳥取にある小さなキリスト教女学校⁽²⁶⁾のことを案じている。

そして、いよいよ帰国に向けての心構えを語る、この書簡の中で注目すべきことは、「同志社女学校はとても好きですが、私の働き場所は東京だということ、またいつか休暇を取らねばならず、取るなら今ということも、かなりはつきりしています」と述べていることである。この期に及んでも、デントンの気持ちだが、「大好きな」同志社女学校と東京の間で揺れ動いていること、さらに続けて、

一方、勉強もすぐくしたい（世の中に遅れないため）、また東京で働くことになれば、時勢の思潮に追いつかねばなりません。この状況と私の限界をご存じですから、私の時間が最も有効に使われるようにお手配して下さるものと信じています

と、ここでも東京が、休暇後のデントンの視野に入っていることが分かる。

なお、クラップ著・同窓会訳『ミス・デントン』の中には、もう一通、一八九九年二月にデントンが鳥取から出したという長文の手紙が紹介してある（『ミス・デントン』六一―六四）。ということは、結局は一年間鳥取ステーション所属の宣教師として在住できたと言える。この期間、彼女の傍には、秘書、通訳として、東京のキングスレー館で働いていた同志社女学校卒業の豊田谷子がいた（『期報』一一―一五）のであるが、帰国に際し、デントンはハワイで婦人夜学校および小学校で働くことになっていた豊田を同船させて、ハワイまで見送った（Denton to Barton 1900.3.30。『期報』一四 一一）。とことん卒業生の面倒をみるデントンの姿である。一方、「日本語は解されても達者に話されない事で有名であった」（『ミス・デントン』D二六）鳥取時代のデントンの活動を支えたのは、前の一カ月弱が松田幸であり、後の約一年が豊田谷子だったことになる。

おわりに

以上、デントンの来日から第一回の賜暇休暇までの一二年余を概観したが、本論のタイトルでも明らかにしたように、それは同志社女学校を世界一の女学校と見定め、生涯をその教育に捧げることを目途に来日したミス・

デントン、というこれまでのイメージとは異なるものであった。同志社の要請は、最初から男子生徒を教えるための教師であったのだし、ゴードンの推薦もデントンの決意も、「新島襄」を助けたいとの一事であった。

しかし、教室で出会った同志社の男子生徒による女性蔑視の異文化体験は、最初にデントンが東京で出会った高尚で崇高な日本文化の持つ面とは全く異なる側面であり、マイナスの異文化体験となった。それだけにいっそう、日本文化に対するデントンの驚き、懼れは測り知れないものとなったのであろう。

また、男尊女卑の日本の伝統の中で、女性が「校長」職に就くことに関して、デントンの考えは大いに揺れた。最終的にデントンの気持ちが変わって、「校長」職に就く積りになったときに、今度は、周囲の評価が、デントン「校長」に絶対反対であったことは、皮肉であった。ホワイト「校長」の長期にわたる看病疲れも大いに影響したのであろうが、デントンの乱心は、周囲を大いに混乱させた。しかし、日本文化に深く浸透している女性蔑視の考えが、後に女生徒の地位向上の必要に燃える、デントンの教育観を一層強固にしたとも言えるだろう。

さらに、同志社騒動のためにキャンパスを出て過ごさねばならなかった三年余の間に、近代文明の下、急成長している東京での見聞を通して、時代の最先端に行く教養と知識を持つ必要を痛感した。自分の働き場は同志社女学校よりも、この東京であるかもしれないと考えたのは、その活気に触発されたのかもしれない。あるいは中村貢^{みづき}の言うように、「要するにデントンは、同志社は勿論のこと、東京でも鳥取でも、与えられた職場で全力を尽くし、そうすることによって、どの職場にも強い愛着を覚え、その場所に全生涯を投入しても悔いがないという熱心をもつ人であった」(『デントン先生』八〇)ということであろうか。

しかしながら、一九〇一年に第一回賜暇休暇から帰国後のデントンは、もう迷うことなく、同志社女学校一途の道を歩み始めるのであるが、そのことに関しては、次稿で、賜暇休暇中のデントンの動静を辿ることにより、

明らかにする積りである。

注

本稿中で女性宣教師の女学校責任者の職名「校長」に括弧をつけているのは、同志社の職制上では、校長は新島（または、その後継者）なので、区別するためである。ただし、宣教師文書の中では、主任の女性宣教師に「head」または「principal」が用いられている。

(1) これまでデントンの来日日時に関しては、クラブ著・同志社同窓会翻訳委員会訳の『ミス・デントン』の中にある記述「一八八八年一〇月八日に同志社の門をくぐり、また九月八日にサンフランシスコから出帆した、とデントンがよく言っていたが、二番目の数字は大方誤りであろう」のまま、未調査であった。

今回、横浜開港資料館所蔵の *The Japan Weekly Mail* で船客名簿の確認をした結果、二番目の数字も正しかったこと、および、サンフランシスコ・横浜間と横浜・神戸間の船舶の名前と日時も判明した。すなわち、デントンの乗船した英国船オセアニック号は、九月八日サンフランシスコ発、九月二六日横浜着であり、横浜から神戸に移動した際の船舶名は「わたなべ丸」で、一〇月五日横浜発である。

(2) Frances B. Clapp *Mary Florence Denton and the Doshisha*, Doshisha University Press 一九五五、同著の翻訳 同志社同窓会翻訳委員会『ミス・デントン―同志社の宝』と呼ばれた女性の六〇年―二〇〇七／中村貢『デントン先生』同志社女子大学一九七五／小野恵美子『日米の懸け橋』大阪書籍 一九八八ほか。

(3) 日比恵子「ミス・デントン来日の前後」(一)～(四)『同志社談叢』二五―二九(二〇〇五―二〇〇九)

(4) 日比は、中村が『デントン先生』の中で、この校舎がハリス理化学館であるとしていることの誤りを、中村が見ることのできなかつた書簡 Denton to Harris 1890.5.2 を基に、指摘している(『談叢』二九 一三四―一三八)。

(5) 日比は「実質一カ月少々」でないかと類推している(『談叢』二九 一四七)

ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで―来日後一〇年余の紆余曲折を経て― 六四

(6) これまでは、クラップ著『ミス・デントン』の記事により、東京在住期間は二週間とされて来たが、デントンが横浜から神戸に向かった船の出航時間を勘案すると、東京在住は一週間余となる。

(7) ホワイト大病の詳細は、一八九一年二月二日付クラーク宛書簡参照（『アメリカン・ボード宣教師文書―同志社女学校女性宣教師を中心として―』(M・F・デントン書簡―訳および註―) (三) 同志社女子大学英語文学会 *Asphodel* 50, 2015, 164-166)

(8) 東北地方に第二の同志社を開きたいとの新島襄の悲願により、第二回目訪米後の一八八六年八月、仙台に開設された男子のための学校。

(9) 一八九一年一〇月六日離日―十一月二日帰着の旅程であったので、当時の横浜―サンフランシスコ間の所要時間を考えると、アメリカ滞在は国内の移動を含めて一週間もない、ことになる。

(10) 何事にも慎重かつ賢明なマイヤーは、同志社女学校「校長」就任にあたり、自分の未経験を補うために、京都ステーションの J・D・デイヴィス、D・W・ラーネッド、G・E・アルブレヒト三人による諮問委員会 (advisory committee) の結成を依頼していた。

(11) 出国前から仙台で五年間だけ働く積りであったマイヤーとしては、仙台で四年間過ごし五年目を京都での任務を終えた後は、自分が身を引けばデントンとのことなども取まると考え、京都ステーションに辞職願を出していた。

(12) It was recognized too by all that it would be necessary for Miss Denton to leave the school, though no formal action was taken on the point. (learned to Clark 1892, 27)

(13) It was with very great fear & reluctance that the Station consented to have Miss Denton remain with Miss Meyer another year. Whether we did wisely in ultimately yielding, remains to be seen. (Albrecht to Clark 1892, 86)

(14) マイヤーの離日は一八九三年一月四日。彼女の帰国後、同志社女学校は「日本人主導型キリスト教主義女学校」へ完全に移行し、もはや女性宣教師「校長」の役割はなくなった（『女性宣教師「校長」時代の同志社女子校（一八七六一―一八九三）』下巻 二〇二二 四〇）

(15) 松浦政泰（一八六四―一九一九）同志社女学校のキリスト教教育のために多大の貢献をした日本人男性教師（後に教頭）の一人。一八八七年に同志社英学校を卒業後、郷里の松山で同志社風の私塾「海南英学舎」を開設したが、一年後に大阪の泰西学館で教職に就く。一八九〇年、上京して勉学を深めようとし、途中で同志社に立ち寄った際に、新島の死後、校長職にあった小

崎弘道に懇望されて、新島への恩義に報いるため女学校教師を引き受ける決心をした。(宮澤正典『同志社女学校史の研究』二〇一 六五―八二参照)

(16) 一八九五年頃から同志社とアメリカカン・ボードの間で資金問題と教育問題を巡って意見の対立があり、一八九六年には交渉決裂、外国人教師一斉辞職へと向かう事件のこと(詳しくは『同志社百年史』通史編一 一九七九 四三〇―四七六参照)

(17) 英学校の方は、一年後にケイデイが迎えられられるので、その期間は実質一年間であった(本井康博『京都のキリスト教』一九九八 八三〇五)

(18) 一八九七年三月二日認可。佐伯理一郎とデントン兩名で届け出ている。出町講義所を拠点として発足させた。三年間続いたようで、一八九八年を皮切りに、一〇名、一一名、九名の卒園生を出している(『同志社幼稚園百年の歩み 一八九七―一九九七』一九九七 三三―三五)

(19) 『同志社女学校期報』八号(一八九七年六月二四日)、九号(一八九七年二月二八日)によると、デントンは東京に行く前に鳥取に行っていることが分かる。目的は「鳥取英和女学校に赴任のため」であり、松田幸(一八九六年女学校普通科卒)を助手兼通訳として同伴した。出発は一八九七年四月二二日であった。しかし、グリーンの賜暇休暇(一八九七年五月七日―一八九八年二月一六日)を埋めるために東京に戻ることになり、結果として、この時の鳥取滞在は一カ月弱となった。

(20) 当時、番町教会の熱心な信徒であった片山潜が始めたセツトルメント・ハウスであり、同志社女学校の卒業生豊田谷子(一八八七―一九一八)で働いていた。(豊田谷子の消息欄「琴具須鈴館は貧民学校なれば御事業興味多からん」『期報』九 一八)

(21) 鳥取に同伴した松田幸は、東京に戻ってから帝国大学教授ケーベル氏についてピアノの勉強をしていた。その関係で、デントンの肝いりで、一八九八年三月に、ケーベル教授を招いて募金のための慈善音楽会が開かれた。

(22) 福山裕紀子 同志社大学神学研究修士論文「アメリカ女性宣教師メリー・フロレンス・デントンの日本宣教」三六―三九、五〇―五二(二〇一一)

(23) デントンは鳥取在任中に、妹の召天の知らせがなかなか届かず彼女が不安にさいなまれていることを知ったフェノローサ夫人は、東京からはるばるデントンを訪ねて慰めた。当時鳥取へは一番近い駅からでも山地を越えて三日がかりの難儀な旅であった(クラップ著・同窓会訳『ミス・デントン』五八)

(24) Mildred Minurn プリンモア卒の優秀な女性で、前年日本で数カ月を過ごした折にデントンと知り合いになった。初めてのミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで―来日後一〇年余の紆余曲折を経て― 六五

ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで―来日後一〇年余の紆余曲折を経て― 六六

来日なのに、日本人の心をつかむのにこれほど優れた女性を見たことがないと絶賛している (Denton to Barton 1899.4.25)

(25) 同志社大学図書館所有のアメリカン・ボード関係マイクロ・フィルム中、「最後の」の意味である。

(26) デントンが鳥取を去った二年後に、この小さい学校は経営難で閉鎖され、女生徒五名が同志社へ転校して来た。その中の一人井上松代(一九〇五年普通科卒)は鳥取時代のデントンの教授ぶり、および真夜中近くに同志社女学校に着いた時のデントンの歓迎ぶりを思い起こして感謝している(デントン記念誌編纂委員会編『ミス・デントン』D二六二七)

参考文献

- 同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』現代史料出版 一九九九年
 〃 『アメリカン・ボード宣教師』教文館 二〇〇四年
- 同志社女子大学史料室叢書『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校(一八七六一八九三)』
 上巻 同志社女子大学 二〇一〇年
 〃 下巻 同志社女子大学 二〇一二年
- 本井康博『京都のキリスト教』同志社教会 一九九八年
- 宮澤正典『同志社女学校史の研究』思文閣出版 二〇一一年
- 上野直蔵編『同志社百年史』資料編一 同志社 一九七九年
 〃 通史編一 同志社 一九七九年
- 同志社五十年史編纂委員会編『同志社五十年史』同志社校友会 一九三〇年
- 『同志社女子大学一二五年』編集委員会編『同志社女子大学一二五年』同志社女子大学 二〇〇〇年
- Doshisha Faculty Records 1879-1865* 同志社大学人文科学研究所・同志社社史資料室 二〇〇四年
- 同志社女学校同窓会『同志社女学校期報』七〜一四 同志社女学校 一八九六〜一九〇〇年
- 同志社社史資料センター『同志社談叢』二九 二〇〇九年
- Life and Light for Woman XIX 1889, 430*
- Frances B. Clapp *Mary Florence Denton and the Doshisha*, Doshisha University Press 一九五五年(同志社同窓会翻訳委員会訳)『

ス・デントン―「同志社の宝」と呼ばれた女性の六〇年―』同志社女子大学・同志社同窓会 二〇〇七年
中村貢『デントン先生』同志社女子大学 一九七五年
小野恵美子『日米の懸け橋』大阪書籍 一九八八年
デントン記念誌編纂委員会編『ミス・デントン』同志社同窓会 一九五三年
同志社大学図書館および同志社大学人文科学研究所蔵のアメリカン・ボード関係マイクロ・フィルム中の、当該年度に含まれる
アメリカン・ボードの Annual Records / Circular Letters / Missionary Correspondence

